



Title	Constructed Textiles 考「しみ しわ たるみ」
Author(s)	小野山, 和代
Citation	デザイン理論. 2012, 59, p. 118-119
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53345
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Constructed Textiles 考「しみ しわ たるみ」

小野山和代／大阪芸術大学

人間の皮膚に一番近い存在の衣服は、第二の皮膚といわれる。それは、衣服を皮膚や身体の拡張とするものという、カナダ出身の英文学者、メディア・文明批評家、マーシャル・マクルーハンに代表される考え方で、この観点にたてば衣服は「第二の身体・皮膚」ということができる。人の肌に、肌荒れ、皮膚病、切り傷、やけどなどの傷害や、加齢とともに、しみ、しわ、たるみがあらわれるように、衣服にも、染み、痛み、ほつれ、しわなどがあらわれる。両方ともマイナスのイメージが漂い、「悪」とされ、避けたい現象である。

白いシャツもいずれは黄ばむ。色彩豊かな布もいずれは色あせる。美しい人もいずれは老いがおとずれ皺だらけになる。この世のものは無常でうつろいゆく。滅びがあるから、人は若々しい表情を好み、美しく老いたいと望む。

ところが、しみ、しわ、たるみは、染織の意匠や布の表情、美しさと深い関係があるものでもある。しみ、しわ、たるみは、染めあじ、しば、プリーツ、ギャザー、ドレープなどとなって、繊維や布の表情あらわす。しみ、しわ、たるみは、繊維の仕事をするものとして常に意識する対象である。

繊維や布の造形によって表情をあらわす技法には、染めや織り以外に、interlacing, needlework などがあり、それらを総称する Constructed Textiles (構成テキスタイル) は、欧米ではテキスタイル造形の一大ジャンルをあらわす基礎用語となっているが、日本ではほとんど用いられず、その翻訳語も定着

していない。この語を知らずして、日本と欧米の染織文化のちがいを語ることができず、また、立体化、スペース化へと鮮烈な動きを示した現代染織造形の基盤となっているものを構造的にとらえることもできないのではと思う。私はそう考え、Constructed Textiles を体系的にとらえるべく、その技法の分類・解説などを試みてきた。

パネル発表では、自身の技法でもある Constructed Textiles の約20年間にわたる研究成果を、できるだけ簡潔に、またヴィジュアルに展示に集約させようと、解説パネルとともに、現代において Constructed Textiles の展開が顕著にみられる注目分野として、Small Work (小作品) をとりあげた。なお展示作品は、自作によってまとめた。その概要は次のとおりである。

CONSTRUCTED TEXTILES の分類

Fiber structure (繊維の構成)

Interlacing (インタレーシング)

felting (絡み), coiling (巻き), knotting (結び), knitting (編み), braiding (組み), weaving (織り), basketry (バスケットリー), lacework (レースワーク), beadwork (ビーズワーク)

Cloth structure (布の構成)

Needlework (ニードルワーク)

stitching (ステッチ), appliqué (アププリケ), quilting (キルティング), patchwork (パッチワーク), assemblage (アサンブラージュ)

Cloth processing (布の加工)

Shaping cloth (布の変形)

pleat (細長い折襷), drape (優美な襷),
gather (縫集めた襷), smocking (刺繍襷),
shirring (縫縮めた飾り襷), frill (飾り縁
襷), pinching (つまみ襷), shibori (絞り)

Transforming cloth (布の変容)

singeing (焼く), cutting (切る), melting
(溶かす), tearing (破る) etc

Small Work (小作品) について

繊維、布、ゴム、プラスチックなどによる
柔らかな彫刻 soft sculpture (ソフト・スカ
ルプチャー) が、戦後の現代美術の世界で盛
んになった。一方、染織分野では1960年代以
降、欧米を中心に新しい繊維造形による創作
活動がおこり、企画展や個展が開催されてき
た。そのような繊維造形の興隆に呼応するよ
うに、小作品の公募展が、1970年代にイギリ
ス、ハンガリーで、1980年代にはフランス、
日本でも開催されるようになった。

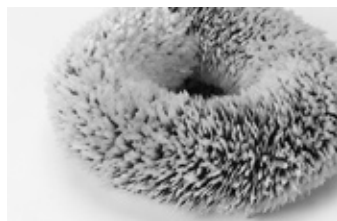
美術界全体の沈滞ムード、財政事情、価値
観の多様化など諸問題を抱え、国際展が衰微
傾向にあるなか、小作品の展覧会は世界の各
地で盛んに企画開催され、大作とはひと味
違った新しい造形分野を確立している。小作
品の魅力は、作者の凝縮された感性が表現さ
れ、繊維の繊細で柔軟な素材と構成技法が存
分に生かされるところにあるだろう。小作品
は大きさにおいてインパクトを与えることは
できないが、ただ大きな作品の縮小版として
あるわけではない。繊維には、柔軟性、変容
性、密度などに繊細な特質があり、作者それ
ぞれの小宇宙が、小作品ならではの世界に鮮
明に反映される。それは、茶室の小さな空間
に自然を感じたり、茶道具に景色を見立て
たりといったことに近いような感覚もある。

小作品は作者の感性、観念、センスまでが

見て取れるのはもちろんだが、日本の作品は
欧米の作品と比較して、その造形のアプロ
ーチの傾向に違いがあるようだ。繊維の物性そ
のものを造形の主題とする表現のあり方は、
日本の作品に顕著で、欧米の作家の社会的な
テーマやコンセプトをかたちにする表現とは
異質で、そのような造形思考が、日本のファ
イバーアートに特徴的であるように思われる。

小さいものはより接近して見るので、より
皮膚感覚に密接となる。そこに遠くで見ると
より近くで見の方がまさっているととらえる
「ちかまさり」の感性が発揮され、小作品に
は繊維素材や Constructed Textiles の本領が
存分にいかされるのではと思う。

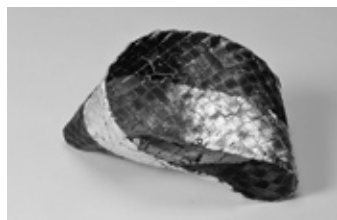
(下記に自作発表 Small Work の一部を掲載します。)



title : Collection-KA
size : 6 (h) × 20 (w) × 20 (d) cm



title : 双頭の鷺
size : 10 (h) × 20 (w) × 12 (d) cm



title : 「re-」
size : 8 (h) × 11 (w) × 10 (d) cm